

3 日の名残り

1 構成

八つの部分から成立している。それぞれ行間を開けたところで段落とする。段落数は見出しの下に記した。

プロローグ 一九五六年七月 ダーリントン・ホールにて 1

時 場所 ダーリントン・ホールにて

事件

雇主ファラディが八月九月五週間アメリカへ帰るので、私に二、三日ドライブに行くようにとすすめた。フォードを貸しガソリン代を持つと提案する。

時 場所 西部地方への旅

事件

女中頭ミス・ケントンから七年ぶりの手紙を受け取り会いに行こうとした。

時 場所 ダーリントン・ホール

事件

二十八人の召使いが雇われていた。スティーブスが執事、ミス・ケントンが女中頭だった。スティーブンスのもと十七人の雇人がいた。二世紀にわたるダーリントン家の所有が終わり、アメリカ人ファラディに所有権が移る。

時 場所 一九三六年 マンウォール

事件

ミス・ケントンは故郷に戻り結婚した。ダーリントンに戻らないか確かめたい。

一日目夜 ソールズベリーにて 1～3

時 場所 夜 ソールズベリー 宿

事件

今朝の出立は一時間近く遅れた。旅の初日が終わった。

時 場所 パークシャーとの州境

事件

生活の場から完全に抜け出した。ダーリントン・ホールを本当に後にした。

事件

百ヤードジグザグに登る。すばらしい田園風景にふれる。

時 場所 これからの数日間

事件

ミス・ケントンと要員補充のめどをつけよう。

2

時 場所 午後三時半頃 ソールズベリー着

事件

宿は質素で清潔だ。主人は四十前後の女、フォードと上等のスーツに大そうな客と思う。

時 場所 午後四時 町中 旅行の第一日

事件

古い木造の家並み、大聖堂を眺める。夜よみがえるのは丘の上で見たイギリスの田遠風景だ。この風景には品格がある。品格は偉大さで表現する。

時 場所 偉大な執事とは何か

事件

チャールビル・ハウスのミスター・マーシャル、ブライド・ウッドのミスター・レーンは偉大な執事で品格があった。

時 場所 三十年代中頃の二、三年前

事件

ミスター・ネイバーズの名は国中の召使い部屋を席卷した。組織面で手腕を發揮した。

時 場所 ダーリントン・ホールの召使い部屋

事件

議論を繰り広げ懐かしい思い出として残っている。

3

時 場所 二十年代、三十年代 ヘイズ協会 三十二年、三年閉鎖

事件

ロンドンとその周辺で影響力を持っていた。団体だ。名家に雇われていることが入会の資格だった。

時 場所 父のエピソード

事件

父は執事として能弁でなく、博識でもなかった。が、自らの地位にふさわしい品格があった。私らの世代はそれを求めた。雇主に従ってインドへ行った執事が食卓の下に虎が一頭寝そべっているのを見つけた。彼はあわてず銃で射殺し無事に収拾した。

父が運転していた車で、二人が卑猥な話をしたり、道順を変えさせたりした時、車をとめてドアを開け脇に立って威嚇し謝らせた。

もう一つは、兄レアードが戦死した時の指揮官に憎しみを抱いていたが、従者として四日間尽くし、高額チップを受け取り慈善事業に寄付した。

父はヘイズ協会の言う「みずからの地位にふさわしい品格」を示し、品格そのものような人だった。偉大な執事は職業的あり方に常住しそこに踏みとどまる。

時 場所 執事

事件

執事はイギリスにしかおらず、ほかの国にいるのは召使いだ。イギリスほど感情の抑制がきく民族はいない。

二日目 朝 ソールズベリーにて 1～13

1

時 場所 宿

事件

慣れないベットでよく眠れなかった。静寂の中ミス・ケントンの手紙を反芻していた。

時 場所 二十年前 コーンウォール

事件

結婚するため、ミス・ケントンはコーンウォールに去った。今、結婚生活は破綻しているらしい。

時 場所 リトル・コンプトン

事件

ヘルストンのベン家を出て、知人の元に身をよせているらしい。

時 場所 ダーリントン・ホール

事件

ダーリントン・ホールに戻り、残りの年月を過ごせたら慰めになると思う。

時 場所 手紙

事件

現在の境遇に絶望しかかっている様子がある。

時 場所 三十年以上前 三階

事件

ミス・ケントンが私を呼び窓の外のゆっくり歩く父の姿を見せた。

時 場所 一九二二年 ダーリントン・ホール

事件

女中頭と副執事が結婚し退職した。補充するためミス・ケントンと父が同時期に来た。彼女は私事を仕事に優先させない。

父は、ジョン・シルバースが亡くなり、ラクドラ・ハウスの名執事として役割を終え、職と住まいを探していた。七十代で持病があり、執事としての勤めは難しかった。能力と経験を役立てて貰おうと雇った。

時 場所 ある朝 食器室

事件

書類整理をしていると、ミス・ケントンが花を生けた大きな花瓶を持って入って来た。部屋を明るくするためと言うが、気を散らすものはない方がいいと言う。父をウィリアムと呼ぶことに副執事を呼び捨てにすることは不適切と注意する。

時 場所 この後

事件

ミス・ケントンは食器室へ花を持ち込むことはせず、仕事に早く慣れた。仕事熱心な女中頭だ。父の呼び方もミスター・スティーブンスに変えた。

時 場所 二週間後

事件

ミス・ケントンはちり取りが片づけられていないと言う。三十分前父が玄関を掃除していた。

時 場所 1週間後

事件

ミス・ケントンは銀器の中に磨き粉がついたものがいくつもあると言う。銀器磨きは父の重要な任務の一つで自慢である。

3

時 場所 雷雨 午後 ビリヤード室

事件

トロフィーを磨いていると入って来て、ミス・ケントンが踊り場の三十人とこの部屋の三十人が入れ替わっていると言う。

時 場所 戸口

事件

猛烈な勢いで飛び出すと、意図を見破って追い越し行く手をさえぎる。ミス・ケントンは三十人がほこりをかぶったまま、置き場所を間違っていると言う。スティーブンスの父は仕事を抱え過ぎている。弱っている。何とかしないと注意する。鼻の先からスープのボールに水玉がぶら下がると言う。

時 場所 あの日あの午後 数カ月後

事件

父は転倒し状況は大きく変わった。

4

時 場所 書斎の外の廊下

事件

ダーリントンは多くの百科事典を揃えた本棚を置いていた。ファラディは装飾品ガラスキャビネットを置いている。ダーリントンは国際政治に役割を果たした。

時 場所 午後

事件

ダーリントンは五十代半ば、背が高くきゃしゃで猫背のしるしが現れていた。彼は父のことについて、屋敷内で起こることは相当な影響を及ぼすかもしれない。ヨーロッパの今後に関わる任務を少し見直した方がいい、失敗が命取りになる任務を任せるなど忠告する。

時 場所 一週間前 あずまや

事件

父は茶菓をお盆に山盛りして運んで行った。石段を登り終わったところで倒れた。ダーリントンは転倒現場を目撃していた。父は車椅子で運びこまれた。自尊心は傷ついた。

5

時 場所 父の部屋 小さく殺風景

事件

父は制服を着、ベッドの端に座っていた。いかつくいかめしい顔をしていた。

話があると切り出す。副執事の任務さえこなせなくなった、来週の国際会議には出られない、給任も禁止されたと言うと、五十四年給仕してきたと言う。リストの任務だけするようにと紙切れをベッドの端に置いた。転んだのは石段のせいだ、直さねばならないと言う。

時 場所 ミス・ケントンの手紙

事件

ミス・ケントンは父のことを気にし、何度も問題点を指摘した。夕方の記憶が三十数年間脳裡にとどまっていた。二人で窓から父を見下ろした時、ミス・ケントンには多少の罪悪感があった。

時 場所 あずまやに向かう上り坂

事件

父は石段をゆっくり上がり、向きを変えて早く降りた。目を地面から離さなかった。

6

時 場所 今回の旅行

事件

イギリスの田舎のすばらしさを味わう機会だ。

事件

主要道を避け、田園地帯の中牧草地の快い香りを満喫した。大聖堂の尖塔も見た。ニワトリが出て来てホーンを鳴らす。農婦との出会いでよい気分になる。上機嫌でソールズベリーに到着した。

時 場所 父のこと

事件

父に対して無神経という印象もあるかも知れないが、重要な国際会議を前にダーリントン・ホールであやまちは許されない。

時 場所 一九二二年三月の会議

事件

初めての国際会議で以後十五年間にいくつもの国際会議が開かれた。私の執事としての人生の転機だった。品格を身につけた。

7

時 場所 一九二二年の会議

事件

ダーリントンは三年以上前から会議のために動いた。カール＝ハインツ・ブレマンは戦争直後最初に来た。ドイツ軍将校の軍服を着ていた。二年の間に定期的に来たがその都度様子

が悪くなっていった。一九二〇年ダーリントンは初めてベルリンに行った。敗れた国をあんな風に扱うとは不名誉なことだと言う。

時 場所 ある冬の夜

事件

ダーリントンはリチャード・フォックスと二人だけで食事をした。彼はブレマンは敵だったが紳士だった。戦争が終われば敵ではない。ドイツ民族への復讐ではないと言った。

時 場所 ハングルクからベルリン 列車

事件

列車の中でブレマンはピストル自殺した。ダーリントンは嘆き悲しんだ。

時 場所 ブレマン死後二年

事件

戦後、敗戦国を罰し続けるのは道徳に反する、ドイツの経済的混乱を静めないと世界中に広がると言う意見が出た。

時 場所 一九二二年初め ダーリントン・ホール

事件

ダーリントンはベルサイユ条約の過酷な条項改定の非公式の会議を開くつもりだったが間に合わなかった。

時 場所 一九二二年 春 イタリア会議

事件

イギリス首相ロイド・ジョージは会議を開くことを提唱した。明確な方向を打ち出せなかった。

時 場所 一九二三年 スイス会議

事件

ダーリントンはスイス会議に目標を定めた。フランス人のせいだとは言えない。友邦の悪口は言えない、フランスの参加がなければドイツ問題など討論にならない。二ヵ月の間に三度パリに行きデュポンの同意を得る。

時 場所 一九二三年三月

事件

会議の日取りが決まる。

8

時 場所 ダーリントン・ホール

事件

期日が迫り、幹事の私に重圧がかかる。一人でも不快を感じると会議全体に悪影響が及ぶ。

時 場所 父あずまやで倒れる

事件

最初の客到着の二週間前のことだ。父はワゴン車で運ぶ。二十年若返る。ミス・ケントン

は準備万端整える。

時 場所 最初の客

事件

イギリスチームの外務省幹部二人とディビッド・カーディナルの三人が到着する。

時 場所 直前準備の真最中 書斎

事件

ダーリントンは私を呼び、ディビッドが息子のレジナルドに生命の神秘を教える仕事を私にやれと言ってきたが、これをやってくれと頼む。

9

時 場所 一、二時間後 読書室

私は思いがけない頼みごとに面くらう。レジナルドは書類に没頭していた。生真面目で学究肌だ。伝言で、紳士と淑女の間には重要な点で違いがあると言うと心得ていると答える。資料は読み基礎調査も済んでいると言う。デュポンについては新しい情報はないわけだねと問う。

時 場所 その日の午後 二日早く

事件

アメリカ上院議員ルイスが到着する。アメリカは正義の側に立つ、ベルサイユで過ちがあったと言う。デュポンはドイツ人を憎んでいる。

ダーリントンは倒れた敵を足蹴りにするフランスの行為は野蛮に見えると言う。

時 場所 窓の外 庭 ガチョウ

事件

偶然に会ったふりをして散歩しているレジナルドに声をかける。あれはガチョウ、春の訪れとともに変化が生じている。特殊の変化だと言うと、デュポンがご機嫌斜めだ、声をかけてくれてありがとうと言う。

時 場所 屋敷

事件

戻る。デュポンは会議の行方を左右する人物だ。

10

時 場所 一九二三年三月最終週 雨の朝 居間

事件

部屋への出入りを頻繁に繰り返し会議の内容を逐一追えなかった。ダーリントンはベルサイユ条約のドイツの悲惨な状況を緩和すべきと訴えた。ディビッド・カーディナルはドイツの賠償金支払いの凍結、ルール地方からのフランス軍撤退を呼びかけた。デュポンは討論に加わらなかった。

時 場所 父の部屋

事件

報せを受け急いだ。父はワゴンの縁を両手で握り、片膝つき顔をたれていた。目は閉じ顔に汗の粒が浮かんでいた。私はワゴンから引き離しベッドに寝かせた。ミス・ケントンが付き添うと言うので部屋を出る。

時 場所 居間

事件

メレディス医師は私に父の加減はよくない、いくつか尋ねる。七十三才と答える。

1 1

時 場所 その日の夕方 デュポンの部屋

事件

ノックしようとしたが、ドアに耳をあて中の様子を伺う。具合の悪い時を避けるためこうする。ルイスがデュポンにねらわれていると警告し、数年前戦場で肩を並べた仲だと言う。

時 場所 次の日 居間

事件

討論は熱を帯び、やりとりも激しいものになっている。多くの人がデュポンを非難している。

時 場所 父の部屋 再発から二日目

事件

父は万事順調かと聞く。一触即発と答える。よい父親だったか、お前はよい息子で誇りに思うと言う。

1 2

時 場所 台所

事件

パニック寸前で全員緊張しきっている。

時 場所 一時間後 晩餐会

事件

壮大な宴会場が人員で一杯なのは感動的だ。

時 場所 翌日 昼食後 出立

事件

ダーリントンは友好と善意に満ちた雰囲気の中で行われたと述べた。

デュポンは、ドイツの賠償金支払いが凍結された場合我々のアメリカへの債務返済がどうなるのかと言った。ルイスはダーリントンは上品、正直、善意に満ちているが、アマチュアだ、国際問題はアマチュアの手には負えない、専門家、プロが必要だと言う。全体が唾然として静まり返る。

ダーリントンはアマチュアリズムと呼んでいるものを大半は名誉と呼んで尊んでいる。プロは虚偽や権謀術数で自分を通す人で、善や正義より貪欲や利権を求めると言うので会場全体から同意の声が上がる。

時 場所 宴会場

事件

ミス・ケントンが父の容態が悪くなったと告げるので出る。

時 場所 屋根裏の部屋

事件

父は額が鈍く赤味がかっている。ミス・ケントンの医師が見えたら知らせると言うのに悲しいことだが下へ戻らねばならないと急いで階段を下りる。

時 場所 喫煙室

事件

客はお祝い気分だ。レジナルドは気分が悪いのかと心配する。ワインを注いで回る。ダーリントンは大丈夫か、大変な日だったからと言う。

時 場所 戸口

事件

デュポンが新しい包帯を急いでくれとせかす。ミス・ケントンは医師はまだ見えないと嗚咽する。目を閉じてあげていいかと言われそうしてくれと頼む。父の死顔を見たいのは山々でも、任務を果たしてもらいたいと望んでいるはずだ。

時 場所 喫煙室

事件

デュポンは医師を呼んでくれたかと言う。こちらに向かっていると答える。レジナルドはダーリントンも君のような執事がいて嬉しいだろう、伝言を取りついたり、お茶を運んだり、そういう人がいないと誰も何もできないと称える。

時 場所 ビリヤード場

事件

デュポンは医師が来たことを喜び、いい執事だとほめる。

時 場所 屋根裏

事件

医師は所見を書き、卒中だ、苦しまなかった、何をしてやっても救えなかったと言う。医師をビリヤード室に案内し、喫煙室に戻る。

13

時 場所 一九二三年の会議

事件

執事人生の一大転機だった。ミスター・マーシャルやスター・レーン、父にも匹敵する「品格」をかいま見せた。大きな誇らしさを覚える。

二日目 午後 ドーセット州モーティマーズ・ポンドにて 1

1

時 場所 ヘイズ協会

事件

入会第一の条件は「入会申請者が名家に雇われていること」だ。

名家を私どもの世代は雇主が地主階級とか実業家か爵位があるか旧家かで重視する。

私どもは理想主義的な世代で、執事としての技量が問われた。

時 場所 なりたての頃

事件

私は雇主から雇主へ頻繁に移動し、ダーリントンにめぐりあい満足した。いかに特質を身につけても、発揮する場がなければ認められない。偉大な執事ミスター・マーシャル、ミスター・レーンは道徳的な巨人にそれぞれ任えた。

時 場所 今朝 すばらしい天気 昼 田舎 宿

事件

美味しい食事をとった。

時 場所 ドーセット州

事件

エンジンから焼けるような臭いがし車を止めた。走り出した。

時 場所 丈の高い建物 ベントレー

事件

ワイシャツ姿の男が出て来て、ラジエーターに水を入れてくれた。男は池へ行ってみることをすすめた。

時 場所 ダーリントン・ホール

事件

男はすごい屋敷だろうと言う。ダーリントンが三年前まで住んでいて、亡くなってアメリカ人ファラディが住んでいる。その人に雇われている。

時 場所 モーティマーズ・ボンド 小道

事件

男がすすめた池に向かう。三十分少しで着く。小道をたどりたがやめ、ベンチに座って三十分以上眺めた。

時 場所 何ヶ月か前

事件

アメリカ人でイギリスに二十年余り住んでいるウィークフィールド夫妻が来て、ファラディが案内した。夫人はアーチを数年前に作られたまがい物と批判する。ファラディが本物がほしかったと残念がるのに、雇人が過去の雇主のことを言うことは行われていないと答える。

時 場所 あの日の声と今日の午後

事件

ウェークフィールド夫人に対するあの日の私の言動と先程起こったこととの間には向ら

かとの関係がある。雇人が過去に他人のために働いていたと言う印象を与えることも好ましくない。

時 場所 三十五年前

事件

ダーリントンに歳月を捧げた。ダーリントンは高德の紳士、道徳的主人で私こそ真に名家に雇われていた執事だ。

三日目 朝 サンセット州トーントンにて

1

時 場所 馬車屋 一泊 小さな部屋 夕食 サンドイッチ 階下のバー

事件

リンゴ酒を飲んだ。五、六人の農夫が私のことを気にしている。真夜中過ぎまで下でガタガタやっている。朝は女房がどなるから眠れないと言う。メンドリが時をつくるとジョークを言うが当惑気味に笑う。

時 場所 数カ月間

事件

ファラディのジョークに受け答えできるようになりたいと努力し続けた。彼のジョークは上品なものだ。冗談や洒落が秘める危険には注意する必要がある。

2

時 場所 トーントン

事件

喫茶室は二十五、六人座れるテーブルがある。

時 場所 マースデン

事件

昨日、道路地図で見つけた。ギフェン社があった。ギフェン社の黒蠟燭は銀器に磨き粉として優れている。

時 場所 二〇年代初頭

事件

ギフェン社の黒蠟燭が初めて市場に現れた。銀器磨きは執事の任務の中心にある。私どもの世代では執事がした。ミスター・マーシャルはその重要性を世界に広めた。客は長時間銀器を手に取り眺めた。

時 場所 銀器磨きの秘訣

事件

よい磨き粉を使うことと作業を監督することだ。

時 場所 ダーリントン・ホールの銀器

事件

客に良い印象を与えた事例はいくつもある。

時 場所 駐英ドイツ大佐リップントロップ

事例

ハリファックスと非公式の会談をした。ハリファックスは銀器をほめた。

ヒットラーは本心をイギリスから隠しておきたかった。リップントロップの任務はイギリスでの陰謀工作を指揮することだった。

時 場所 三〇年代全般

事件

リップントロップは最高の屋敷で尊敬された。

時 場所 一九三六年、七年頃

事件

頻繁に出入りし頻繁に主賓として招待された。ダーリントンも何度かドイツに行きナチの歓迎を受けた。

時 場所 ニュルンベルク決起集会の前後

事件

イギリスの紳士淑女がドイツの歓迎を受け賞賛と賛美を口にした。

時 場所 反ユダヤ主義 英国ファシスト連合

事件

ダーリントンは反ユダヤ主義を嫌悪し、英国のファシスト連合の醜さに気づいていた。物事の中で活躍した。

時 場所 ダーリントン・ホールの銀器

事件

ハリファックスに好ましい印象を与えた。銀器の功績だ。

時 場所 執事業界

事件

執事は偉大な紳士に任えるべきだ。国家の大事の中で執事を務めたという満足がある。

時 場所 数カ月間 小さな過ちが目立った

事件

ファディはフォークを取り上げ眺め、指先で先端に触れた。私はフォークを回収し、満足できるフォークを持って来た。

過ちは人手不足も重大な問題だか、ミス・ケントンが戻ればなくなる。手紙に復帰の願いを感じとろうとしたがみつけれなかった。

時 場所 四十八時間以内

事件

ミス・ケントンと再会して、言葉を交わし合っている。

三日目 夜 デボン州旅ストック近くのモヌカムにて 1～8

時 場所 友ユダヤ主義

事件

ダーリントンは多数のユダヤ人召使いを雇っていた。

時 場所 三〇年代初期の数週間

事件

キャロリン・バーネット夫人は四十台、妖艶、頭がいい人と評判だった。

時 場所 一九三二年

事件

夫人は頻繁に訪れ、ダーリントンをロンドンの貧民に連れ出した。こうしてダーリントンは貧しい人々への関心を高めた。また、夫人は黒シャツ組織の一員だった。ダーリントンは夫人の影響でユダヤ人へ敵意を抱きユダヤ人の召使いを置かないことにした。

時 場所 ミス・ケントンの部屋

事件

ダーリントンは客人の安全と幸せのためユダヤ人の召使いを置かないと言い出す。二人の女を解雇させねばならない。ミス・ケントンは六年以上尽くしてくれた二人を解雇したくないと言う。私は職業上の義務は主人に従うことだと実行する。

時 場所 翌朝 会議室

事件

簡単に事情を説明する。二人はすすり泣く。

時 場所 二週間

事件

ミス・ケントンは態度を改める気配りを見せない。

時 場所 ある夜 打合せ

事件

ミス・ケントンは忙しすぎてそこまで行き着かないと答える。

時 場所 数カ月

事件

ミス・ケントンはからかわれても黙りこむ。

時 場所 一年以上後

事件

バーネット夫人の影響力も消滅し、姿は見られなくなる。ダーリントンは黒シャツ隊の醜い姿に気づく。ユダヤ人女中のことを間違っていた、償いをしたいと言う。

時 場所 あの午後 あずまや

事件

ミス・ケントンはクッションのほころびを縫っている。去年の今頃解雇問題が起きたと言うと自尊心があったらいなかったと答える。

時 場所 ポプラの木

事件

私は視線を戻す。ミス・ケントンは臆病だった。叔母が一人いる。別の屋敷を見つけるのもこわかった。私の主義主張なんてこんなもの、去ることはできなかったと言う。

ダーリントンが間違いを認めた。心が休まったと言うと、友人の疑問も持っていない、追いつくのが正しいと思っていたのではないかと答える。

二人が出ていくことでとても苦しんだ、解雇に賛成できないのは当然だが自明のことと
思っていた。

時 場所 暗くなる

事件

私は先にあずまやから外に出た。

時 場所 ユダヤ人召使い解雇の顛末

事件

二人の代わりを見つけようとしていた時、ライザが現れた。前の屋敷を怪しげな理由で辞
めている。ふさわしくないと言う私に、ミス・ケントンは可能性がある。監督しい女中
に仕立てると反対する。

時 場所 数週間

事件

目覚ましい進歩を遂げ、ミス・ケントンは鼻高々だ。

時 場所 ある晩

事件

ある程度の成功を収めている。ミス・ケントンは可愛らしいから否定した。見目のよい娘
を召使いにしたがらない、気が散ることを恐れているからだと言う。

時 場所 八、九カ月

事件

ライザは突然下僕と消える。手紙には二人の愛が書いてあり感謝はない。ミス・ケント
ンはせっかくのチャンスを投げ捨てていずれ捨てられる、結局何にもならないと批判する。自
分が間違っていたと言う。

4

時 場所 ライラー夫妻の家の屋根裏部屋

事件

昨日ラジエーターの水で失敗し、今日はガス欠を起こす。執事は組織的な思考と先を読む
能力が必要であると考えていたが過ちを犯した。

時 場所 タビストック泊予定

事件

農業祭で部屋はふさがっている。

時 場所 急な上り

事件

半分上ったところでガソリンが切れる。

時 場所 一晚 ティラー家

事件

村に宿はないので泊めてもらう。今夜の数時間は厳しい試練だ。ダーリントン・ホールの思い出にふけり心が休まる。

時 場所 数週間前

事件

ミス・ケントンに会えるかも知れないと思い始めた。

時 場所 一九三五年か六年の頃

事件

長い年月一緒に働き呼吸が実際に合うまで築いた二人の関係はあの頃変化した。ココア会議もやめた。

時 場所 食器室

事件

ミス・ケントンは勝手に入って来た。三回花を持って来ようとした。この部屋はプライバシーと孤独が保証される場所であればならない、貴重な自由時間を楽しむ所だ。

時 場所 プライバシー

事件

ミス・ケントンは勝手に入って来る。何を読んでいるのかしつこく尋ねる。本をひきはがしにかかる。プライバシーに踏み込んで来ると抗議する。

時 場所 おセンチな恋愛小説

事件

ミス・ケントンはただのおセンチな恋愛小説とさげすむ。英語力を維持し向上させるため巧みに書かれた本は有意義だ。客との会話に生かせる。

時 場所 昔の小さな出来事

事件

二人の関係が徐々に変わって来た。彼女の行動は危険信号だった。

5

時 場所 休暇の取り方

事件

食器室での一件が起こる一月前までは、休暇の取り方は決まっていた。この頃突然変わり戸惑った。ミスター・グレアムに相談する。ミス・ケントンは三十三、四才でまだ結婚できる、結婚してやめた女中頭は多勢いると言う。

時 場所 あの夜

事件

グレアムの言い分を否定したが、もしかしたらとひっかかっていた。不可解な外出は求愛者に会うためかも知れない。彼女が去ることになれば一大損失だ。

時 場所 グランチェスター・ロッジ

事件

ミス・ケントンはそこで知り合った人で執事をしていた、旧交を温めていると言う。私について、自分に満足しきっている。執事の頂点を極めている。領域内のことは全て目を届かせていると言う。

時 場所 ココア会議打ち切り

事件

ミス・ケントンは打合せに発言がない。遠くをさまよっている。注意散漫で気のない相槌を打つ。有意義だったが、疲れさせている、やめるべきだと言う。

6

時 場所 ココア会議数週間

事件

ミス・ケントンは再開をそれとなくほのめかした。折れていたらどうなっていたか。決定が転機だった。ココア会議の廃止、食器室での一件に違う対応をしていたらどうなっていたか？

時 場所 叔母の死亡通知 朝

事件

手紙を届けると、ミス・ケントンは封を切り一昨日叔母が亡くなったと言った。明日葬式で休暇を取りたいと言った。

時 場所 午後 食堂

事件

新しい女中に尋ねると、大変よくやっていると答える。

時 場所 サイドボード

事件

二重に確認するようにしている。少し手抜かりがあった。瀬戸物を棚に乗せてあるのは見た目に危険、アルコールにはたきがかかっていないと指摘すると、新しい女中達にも少し目を光らせるようにすると答える。そっぽを向き、サイドボードを閉じると出て行った。

つまらない出来事のために夢が取り返しのつかないものになるなど、当時知ることはできなかつた。思い出に我を忘れた。

時 場所 明日 ガソリン 昼 リトル・コンプトン

事件

到着し二十年ぶりにミス・ケントンに再会できる。

時 場所 回り道

事件

数時間は神経を疲れさせた。数人の村人が来たことは居心地が悪かった。

7

時 場所 テーラー家 石油ランプ 一軒家 屋根裏部屋

事件

アンドリュースはモスクムで過ごすのも悪くない、旦那のような立派な方がこの辺りを通るのはめったにないと言う。

ライラー夫妻は通りがかった誰かに伝えた。

トレバー・モーガンは村は歓迎している。村の誇りと言う。ハリー・スミスはフォードは見事な車、旦那は礼儀正しいと言う。ミスター・スミスは品格は紳士だけのものではない。誰でも努力して身につけられると言う。また、ヒットラーの言う通りになっていたらみんな奴隷だと言う。

私の外交政策と言う言葉に全員畏怖し、驚きに満ちた沈黙に陥る。

ミセス・ライラーがミスター・チャーチルに会ったか聞く。ミスター・スミスが賛成できないことが多いが偉大な人物だと言う。また、イギリスは民主主義国で獲得した権利を行使するのが義務だと言う。

カーライル医師は明朝車の所まで乗せて行く、ガソリンは途中で買って行くと提案する。

8

時 場 屋根裏部屋

事件

私は辛い思いをした。私の身分についての誤解から始まった。ミスター・スミスの主張は理想主義的にすぎ、大方の理解は得られない。

世界の大問題について、自分の意見を持っていても、現実生活に追われている庶民が意見を持つことはできない。一般庶民が知り理解することには限界がある。

時 場所 一九三五年頃ある夜 ダーリントン・ホール

事件

スペンサーが貿易が停滞していることについて私に尋ねる。期待されているのに当惑して見せることで契約を交わした。

フランスとロシアが軍事協定を結ぶことについて私に尋ねる。私はお役に立てないと言うと客達はこらえきれない笑いをする。

ラベルの演説は分裂させる策略かと尋ねる。私はお役に立てないと答える。新たな笑い声が起こった。

時 場所 翌朝 ビリヤード室

事件

はたきをかけていると、ダーリントンが入って来る。昨夜はひどいことをしたと謝罪する。私はお役に立てれば嬉しいと答える。

時 場所 激務数年

事件

ダーリントンは体をいためつけた。ドイツとイタリアは立て直しをはかった。ルーズベルトは大胆な一歩を踏み出した。イギリスは何もよくならないと嘆く。

執事の任務は主人によいサービスを提供することで国家の問題に首を突っ込むことではない。

時 場所 失敗した執事

事件

雇主から雇主へ渡り歩き腰を落ち着けることがない。雇主に批判的態度を取る。

四日目 午後 コーンウォール州リトル・ユンプトンにて 1・2

時 場所 リトル・コンプトン到着 ローズガーデンホテル

事件

昼食をすませたばかりでホテルの食堂に座っている。村の広場の片隅に位置し、三十人程度の泊り客なら容易だ。

時 場所 手紙

事件

三時ごろ訪問したいと書いた。現在の住所が歩いて十五分位の所にある。

時 場所 出発以来よい天気

事件

今朝も出発した時は明るい日が射していた。

時 場所 朝食

事件

ミセス・テラーの朝食を食べる

時 場所 七時半

事件

カーライルがローバーで迎えに来た。ガソリンを一缶持って来た。彼はどこかの屋敷の召使いかと尋ねる。圧倒的な解放感からダーリントン・ホールの執事と答える。ハリー・スミスは言っていることは支離滅裂と言う。大問題について強い意見を持っているようだと言う。みんなをたきつけようとしているのだと答える。

時 場所 フォード

事件

車に着くとカーライルはガソリンを注ぐのを手伝った。

時 場所 コーンウォール州境超え 九時頃

事件

今日のうちにミス・ケントンに再会する。

時 場所 リトル・コンプトン到着

事件

二十年間いつも思い出す。ミス・ケントンの部屋のドアの前に立ち、くやみを言うか迷った。叔母の死亡通知を受け取った直後のことか、違うのかも知れない。レジナルド・カーディナルが不意に現れたあの夜かも知れない。

2

時 場所 ディビット・カーディナル死

事件

彼は、三、四年前乗馬中の事故で死んだ。レオナルド・カーディナルは息子でコラムニストだ。頻繁にやって来る。

時 場所 あの日 玄関

事件

彼は今晚泊めてくれるか尋ねる。私は夕食後に客が見える予定と答える。

時 場所 居間

事件

カーディナルは客は誰かと聞くが分かりかねると答える。

時 場所 ミス・ケントンの部屋

事件

カーディナルが見えたと言うが、ミス・ケントンは二週間前からの約束だからと出かける。相手は知り合いで結婚を申し込まれている。どう返事するか考えている。知り合いは来月から西部地方で新しい仕事に就くと言う。

時 場所 二十分後位 階段

事件

ミス・ケントンは床板を荒々しく踏み鳴らす。怒りの表情で見上げている。

時 場所 夕食

事件

カーディナルが、客は特別な人か尋ねるとダーリントンは嚴重な秘密と答える。同席を聞くと、機密保持が最高の要件と答える。

時 場所 八時半 中庭 自動車

事件

何人もの警官が見え、二人の大変立派な紳士が玄関に入って来る。

時 場所 居間

事件

飲み物などを持って行くと、四人の紳士が和やかにしている。

時 場所 廊下 二時間

事件

廊下のいつもの場所で待機する。

時 場所 裏口のベル

事件

警官が私に、ミス・ケントンに身分の確認を求めた。

ミス・ケントンは知り合いとの間にどんなことがあったか聞かないのか？申入れを受け入れたことだけ伝える。契約の解除まで勤めると言う。私は世界的な重要性を持つ出来事が進行している。心よりおめでとうと言ひ二階へ戻る。

十数年任えた私がやめようと言うのにそっけない言葉だ。持ち場に帰る。知り合いと私にとってあなたは重要な人物だった。失礼して上に行く。

時 場所 二階

事件

戻って例の持ち場に就く。

時 場所 読書家

事件

カーディナルが手招きしもう少しブランディがほしいと言う。コラムを書くのだからこれ以上召し上がるのはどうかと言う。

カーディナルは立ち寄ったのは偶然ではない、密告があったからだ。あの部屋でこの時ダーリントンは深みにはまろうとしている。

イギリスの首相、外相、駐英ドイツ大使が会っている。敗れた敵に寛大な振舞、友情を示すのは本能のようなものだ。父が生きていたらやめさせるために何かしたはずだ。この数年間ダーリントンはヒットラーがイギリスに確保している有能な手先だった。

私はダーリントンは常に国家間の相互理解に尽くして来た。ヨーロッパに平和が継続するよう努力していると反論する。

時 場所 居間でベル

事件

入ると三人は難しい顔をしている。

時 場所 裏階段 二階

事件

ミス・ケントンが先程は愚かしい振舞をしたと言う。二階で国の大事が進行していると戻る。彼女はまだ起きて泣いている。

時 場所 アーチの下の持ち場 一時間

事件

待機し続けた。大きな勝利感が沸き上がる。女も誇りに思ってくれただろう。私はこの世界という車輪の中心にいた。

時 場所 アーチの下

事件

執事人生で成し遂げたことの集大成がここにある。あの夜の勝利感と高揚に説明はない。

六日目 夜 ウェイマスにて 12

1

時 場所 海辺の町 昨日午後到着 二泊予定

事件

栈橋の上を歩いていた。明朝早めに出発すればお茶の時間までにダーリントン・ホールに着く。

時 場所 リトル・コンプトン ローズガーデン・ホテル

事件

ミス・ケントンは尋ねて来た。

時 場所 喫茶室 二時間

事件

すらりとした体格に背筋を伸ばした姿勢は昔のままだ。額に小じわができ、緩慢になっていた。四、五日家を出たが戻り、快く迎えられた。夫は健康が優れず早く隠退した。娘は結婚し秋に孫が生まれる。

ダーリントン・ホールの話をすると、幸せそうな顔つきとした。カーディナルベルギーで戦死した。ダーリントンは名誉毀損で敗訴した。戦中に非難され戦後中傷された。名誉は汚され廃人同様だ。

時 場所 バス停留所

事件

停留所までフォードで送る。

時 場所 村の大通り 商店街 田舎道

事件

手紙を読んだ時心配したが、今では無用の心配だ。夫はいじめたりしない。二、三度夫のもとを出ている。夫を愛している。夫を愛せるほど成長した。スティーブンスと一緒にの人生を考えたりする。私は今手にしているものに満足し、感謝せねばならないと言う。

2

時 場所 栈橋

事件

二日前の再開の思い出にふけていた。六十代後半の男が、三年前まで執事をしていたと話す。ダーリントン・ホールの話をすると興味を持ち夢中になって聞く。ダーリントンは過ちを犯したと言った。私は選ばずに信じた。男は隠退してから楽しい、前を向き続けなくてはいけないと言う。

時 場所 男去って二十分

時 場所 栈橋の灯り

事件

ベンチに座ったまま群集を観察する。

時 場所 明日 ダーリントン・ホール

事件

帰ったらジョークの練習をし、ファラディをびっくりさせる。

2 舞台

一九五六年七月、ロンドンダーリントン・ホールからウェイマスにかけて六日間のドライブをする。道々一九二〇年頃からのダーリントン・ホールでの執事の生活を振り返る。

3 人物

(1) スティーブンス

ダーリントン・ホール

ダーリントンには三十五年間任えた。真の名家に雇われていた執事人生だった。

父は執事で品格の体現者だった。正しい発音、弁舌、博識はなかった。

私は父の監督下で見習いを始めた。初めての執事職を得たのは、マガリッジ夫婦のこじんまりした屋敷だった。

父は、インドの執事が食卓の下にいた虎を銃で射殺し痕跡なく処理した話をした。また二人の紳士を乗せて運転していた時、二人が卑猥な話をし、憂さ晴らしの運転をさせたことがあった。父は不愉快感、怒りを見せずに自己の尊厳と客への服従を両立させた。車を止めドアを開け、立ってドアを押さえてこらえた。二人は謝罪した。

兄が南アフリカ戦争で戦死した。悪名高い作戦で、戦死した全員が犬死にだった。その指揮官を歓迎しなければならないことになった時、従者を買って出て四日間を過ごした。指揮官が執事をほめ高額チップを出した。父はこれを善意事業に寄付した。

父は名執事として活躍する。ジョン・シルバース死去に伴い、職を失い、職と住まいを探した。ダーリントン・ホールで副執事と女中頭が結婚し穴があくとスティーブンスは父とミス・ケントンを雇うことにする。七十代で、関節炎の持病がある。仕事上のミスが続き脳卒中で亡くなる。

並みの執事は批判されると個人的あり方に逃げた。偉大な執事は職業的あり方に常住し、そこに踏みとどまる。執事職を身にまとっている。

執事はイギリスにしかない。他の国の執事は単なる召使だ。イギリスの民族ほど感情の抑制がきかない。ケントンは自己制御ができない。品格はない。

「偉大な執事とは何か」という問題についてはヘイズ協会が入会資格を発表したことがある。二〇年代全般に渡ってロンドンとその周辺で大きな影響を持った団体だ。

超一流の執事をしか入会させない。会員の数を極めて少なく保った。超一流のラベルを世間に信用させた。会員数は三十人を越えたことは一度もなく、九人から十人どまりだった。秘密主義の傾向があった。一九三二、三年閉鎖に追い込まれた。

会員になる第一条件は入会申請者が名家に雇われていることだ。名家に実業家、成金は入らない。その後、入会申請者が自らの地位にふさわしい品格の持ち主であることに変更された。偉大な執事と認める人々、ミスター・マーシャル、ミスター・レーンは品格という言葉

でよく表現される。

ミス・ケントンは食器室が暗いので花を生けた花瓶を持ち込もうとする。ステューブンスは気を紛らすと断る。仕事に集中するのに花は不要だ。また、父をウィリアムと呼ぶことも注意する。副執事を呼び捨てにすることは不適切だ。ミス・ケントンの好意を受け入れない。部屋に花を飾り明るくしようとする気持ちを拒否する。仕事をするのが第一だ。執事のあべき姿が優先する。やましきなど問題外だ。

ミス・ケントンはちり取りが片づけてない。三十人が入れ替わっていると指摘する。過ちは些細なことだが意味するところは重大だとステューブンスに指示する。父は手がふるえ鼻水を垂らしている。

そのうち父は転倒し料理を乗せたお盆を運べなくなる。父の過ちを認めたくない。認められないのでミス・ケントンと言い合いになる。

が、ダーリントンは転倒する場面を見て、任務の見直しを命じる。言い訳も反論もしない。同意するだけだ。執事の取るべき態度だ。

父に話すと言い訳をし、石段のせいで転んだ、石段を治さなければならないと答える。ステューブンスはリストの任務だけするようにと紙切れを置いて行く。雇主の意向は父にも通さなくてはならない。

一九二三年の会議はダーリントン・ホールの初めての国際会議になった。それから十五年間いくつもの国際会議を経験した。それは執事人生の転機で執事として成人した見識を身につける。

一九二二年初めの頃、ダーリントンはダーリントン・ホールで非公式な国際会議を開きベルサイユ条約の過酷な条項を改定する話し合いを企画した。公式の会議に影響を及ぼすものにしようとした。

一九二二年春イタリアで同様の会議が開かれる予定だった。が、期日が切迫していて非公式会議は間に合わなかった。イタリアの国際会議は明確な方向性を出せないまま終わった。

一九二三年に予定されたスイス会議に目標を定めその前にダーリントン・ホールで非公式会議を開いた。

三日間の予定で、秘書、通訳を伴い到着日は不明だった。召使い一同にとって激務だった。重圧がかかり、一人でも不快を感じると会議全体に悪影響が及ぶ。人数は男性八人、女性二人のレベルの高い会議だった。数日間準備し特別の職務計画を立てた。

ダーリントンは友人ディビットの息子レジナルドにディビットから生命の神秘の話をしてくれと頼まれた。これをステューブンスにやらせることにした。多忙な会議を開くというとき、関係もない処置を頼む。ステューブンスは雇主の命令に従う。執事として服従の態度をとる。機会を見つけて二度レジナルドに話す。

アメリカ上院議員のルースはアメリカ合衆国は正義の側に立つ、ベルサイユで過ちがあった、デュポンはドイツ人を憎んでいる、フランスがドイツ人を憎んでも仕方がないと言う。

ダーリントンは争いが終わったのに敵を憎み続けることはよくない、倒れた敵を足蹴りにすることは野蛮だと言う。ディビットはドイツへの賠償金支払いの凍結とルール地方からのフランス軍撤去を主張した。

デュポンは無口で討論には加わらなかった。足の包帯を取り替えてほしいと頼んだ。最後にフランスを非難する言葉あった。見解の相違はいくつも残っていると言う。

ルイスはドイツの賠償金支払いが凍結された場合、アメリカへの債務返済がどうなるか心配している。ルイスは無謀、露骨だと批判した。

ルイスはデュポンの喋ったことはナンスセンス、ダーリントンは古典的英国紳士で所詮アマチュアの手には負えなくなっていると言う。二日間はたわごとのオンパレードでプロが必要だと言う。

ダーリントンはアマチュアイズムと呼んでいるものを大半は名誉と尊んでいる。プロは虚像や権謀術数で言い分を通す人のことと言う。善や正義より貪欲や利権を求めると反論する。

国を代表する人が自国の利益を守ろうとして争う。ダーリントンのようにドイツへの思いを述べる人は例外だ。相互不信に緊張は高まる。従者や下僕同士も反目する。ダーリントン・ホールが一触即発にある。

スティーブンスの父は、最初の客が到着する二週間前に倒れる。屋根裏部屋の父の部屋で一日殆ど眠っている。スティーブンスは会議を気にし、介護どころではない。ミス・ケントンが付き添いを引き受ける。容態が悪くなったと報せがあってもいてやることもできない。下へ戻る。後で後悔すると言われても、脈が弱いと言われても急いで下へ行く。医師が見えたら知らせると言われ礼を言って下へ降りる。

息を引き取っても行かず会にも行かない。目を閉じることもミス・ケントンに頼む。薄情と思わないでほしい、死に顔を見たいのは山々、父も任務を果たすことを望んでいる。行けば父の期待を裏切ることになると言う。

父も執事として評価され、息子にもそれを望んだ。息子との最後の対面も望まない。こうして執事の役割を果たす。執事に私情は許されない。父の臨終に立ち会えず、死に目にも会えない。肉親の死に目に会えない。私情を殺し職務に専念する。これが執事の在り方だ。

私情を通せば今、会議は破壊する。人間の情、肉親の情を抹殺してもやり遂げることが執事の在り方だ。雇主への忠誠とは非情で達成される。スティーブンスはこうしてこの会議で執事として認められ品格ある執事になる。

ウェークフィールド夫妻がダーリントン・ホールにやって来た時、夫人はアーチをまがい物と指摘した。彼は確かなことは分からないと答える。執事は雇主の所有物について、真偽のほどが分かっているいなくても語らない。雇人が過去に他人のために働いていたということも語らない。嘘をついているのではない。その事実に触れないのだ。触れると雇主の尊厳を傷つけることになるからだ。雇主は絶対者で雇人は絶対服従だ。

ダーリントンは四十代のバーネット夫人と親しくなった。彼女はロンドンの貧しい人々

への関心を高めた。夫人は黒シャツ隊の一員だった。夫人の影響を受け、ユダヤ人への敵意を抱くようになった。多数のユダヤ人召使いを雇い、人柱差別はない人だった。

それがユダヤ人召使いをおかないと言い出した。スティーブンスは大反対だったが執事としての品格に、判断に感情を交えてはいけないと思い従った。反対するミス・ケントンに職業上の義務は主人に従うことだと言いきかした。ユダヤ人問題は理解できないが主人はよい判断を下すと決定する。執事に意見を言う資格はない。意見はない、求められない。同意するだけだ。正しいか正しくないか問題にならない。この後、ダーリントンは非を認め二人の女中の行方を尋ねる。夫人から離れる。ダーリントンの恋だった。

二人の後にライザが入る。前の屋敷を怪しげな理由でやめている。二、三週間と居つたことがない。スティーブンスがふさわしくないと言うのにミス・ケントンは可能性がある、直接監督しい女中に仕立てると言う。見目のよい娘を召使にしたがらない。気が散ることを恐れていると批判する。スティーブンスは綺麗な花や娘に気をそそられところがある。だから美しいものを見の回りに置かない。

ライザは九カ月して突然下僕と消える。何も持ち出さない。手紙には愛がある。感謝、謝罪はない。ミス・ケントンは自分が間違っていたと言うと、スティーブンスはどの雇主にも起こることと言う。

ミス・ケントンはせつかくのチャンスを投げ棄てて顧みないと非難する。二人には愛がありその成熟に向かった。仕事を続ける意義はない。仕事より愛が大切だ。スティーブンスは二人を愚かと批判する。愛より執事のスティーブンスには当然のことだ。

ミス・ケントンは食器室に三回花を持ちこもうとした。部屋を明るくしようとしてスティーブンスに好意を抱いているのでそうしようとした。彼女は勝手に入って来たと怒る。けじめをつけることが大切な執事に、きれいな花は気を散らすだけだ。女心も分からない。

食器室はプライバシーと孤独が保証される部屋だ。他者の侵入は許さない。物の持ち込みも許さない。指針を守り、反する事柄は拒否する。

ミス・ケントンは更に読んでいる本が何か知ろうとする。人が読んでいる本にはだれでも関心を持つが、気にしている相手ならなおさらだ。しつこく尋ね、しまいには本を引っ張る。スティーブンスはプライバシーが侵害されると必死に守ろうとする。ミス・ケントンは本が何か気になり知りたがる。書名を知りたがる。この時の彼女にプライバシーの考えはない。

わかるとミス・ケントンはおセンチな恋愛小説と片づける。概要を判断する。分かったと思う。なぜそんなものを読むのか分からない。表面的な理解しかできなかった。スティーブンスは英語力を維持し向上させるために読む。執事的能力の向上を図る。これは彼女には理解できない。

非公開の国際会議につづいて秘密の重要会議がダーリントン・ホールで開かれる。イギリスの首相、外相、ドイツの駐英大使が参加する。ダーリントンの仲介による。この日何人もの警官が警護にあたる。

スティーブンスは、世界的な重要性を持つ出来事が進行していると気を張りつめる。待機

している廊下には二時間も立ち尽くす。

ミス・ケントンは知りあいに会いに行く。結婚を申し込まれている。どう返事していいか考えていると訴える。スティーブンスに断るように言ってほしいのでそれとなくほのめかす。が、彼には愛はなく仕事のことだけなので上の空の返事しかしない。外出し戻ると警官に身分の確認を求められる。今夜のダーリントンがどういう状態にあるか全くわかっていない。知り合いとの間に何があったかも聞かない。申込みを受け入れたことだけ伝える。断るように言ってほしかったが全くそんなそぶりはない。上に戻らねばならない、大きな出来事が進行していると気もそぞろだ。

申込みとは何か問われ（そもそもこの間から何にも分かっていないことは明らかだ）、結婚の申し込みと答えるとおめでとうと言う。結婚も希望も何もない。事実そのままだ。契約の解除まで勤めると言う、代わりが見つかるよう最善を尽くす、二階へ戻らねばならないと歩き始める。

先程の位置から少しも動かさず、十数年勤めた私がやめようというのにそっけない言葉だけだと認める。おめでとう、持ち場へ帰らなければならないという。ミス・ケントンは知り合いの結婚に悩んでいるが、スティーブンスは全く解っていない。頭の中は仕事のこと一杯だ。遠回しに断ることもできるように言っても全く通じない。二人は仕事と恋にだけ関わり分離する。スティーブンスはミス・ケントンを人として女として見ていない。執事として女中頭と見ている。

彼は今のその大事な会議のことしか頭にない。ミス・ケントンの思いには全く及ばない。彼女は今夜の会議のことは分からず、結婚の進行のことしか頭にない。長い付き合いで分かりあえ、好意を持ち合ってきたとしても結婚には至らない。仕事一筋のスティーブンスに恋愛も結婚もない。仕事の邪魔になるだけだ。彼は執事に徹し執事一筋に生きる仕事人間だ。

副執事と女中頭の恋があり、ライザと下僕のかげおちがある。スティーブンスとミス・ケントンの恋があってもいいところなのに（職場結婚はどこにでもいつでもある）執事一筋のスティーブンスは独身で仕事に励む。

初めの会議は非公式で各国の代表が集まった。自国の利益を主張し合い衝突した。多くの人が話し合った。スティーブンスは執事の仕事に集中し、父の死をみとることができなかった。執事に肉親の愛はない。

二度目の会議は秘密に首相と外相と駐英ドイツ大使とダーリントンの四人が会した。四人の話の内容は直接知ることはできず、密告を受けてやってきたコラムニストカーディナルの話から推測される。スティーブンスは執事の仕事に集中し、ミス・ケントンの恋の告白を聞き入れることをしなかった。執事に恋愛はない。

いつも非公式の立場から行動していた。偉大な指導者有力者と言葉を交わし、大問題についても耳を傾けていたのは幸運だった。端役でも世界という舞台上で役割を与えられた。

一九三五年頃、ある夜ダーリントンが三人の客をもてなしていた居間へ呼ばれた。スペンサーは、貿易停滞の理由、フランスとロシアの軍事協定、北アフリカ情勢についての演説に

ついて、スティーブンスにどう思うか尋ねる。彼はお役に立てないと三度とも答える。こう答えることを期待して質問したことを承知していた。大きな問題について発言するのは賢明ではない。執事のとる態度ではない。

答えられないと一回一回答えていく度笑った。三人は執事は答えられないと確信してこういうことをした。それが当たって笑った。みせしめだ。スティーブンスは承知して三人に合わせた。ここで意見を述べたら、もてなしは台無しになる。政治に関する会合に関わって来ているスティーブンスに意見はあった。が言わなかった。

執事は客の前で、客の求めに応じるように振舞わねばならない。期待を予感し応じなければならぬ。自分の考え意見は封じ込めなければならぬ。その場の雰囲気を読み、合うようにしなければならぬ。こうしたスティーブンスをダーリントンに後でひどいことをしたと謝る。スティーブンスとダーリントンはぴったり呼吸が合っている。

自動車旅行

プロローグ ダーリントン・ホールにて

新しい雇主ファラディが五週間後アメリカへ行くことになり、スティーブンスにドライブに行くことをすすめる。家に閉じこもっていないで自分の目を見て来いと言う。

職務計画に不備が生じ、ミス・ケントンが戻らないか期待し西部地方へ自動車旅行に出る。

雇主がフォードを貸し、ガソリン代を出してくれる。スーツはいただいたものも含め、何着もある。ダーリントン・ホールの体面を汚さない自動車、服装をして行かなければならぬ。

一日目 夜 ソールズベリーにて

バークシャーとの州境に向かう。見知らぬ風景が変わる。ダーリントン・ホールを本当に後にしたと思う。

大きな岩の上にやせた白髪の方が座りパイプをふかしていた。登ればこれ程の景色はないと言う。百ヤードジグザグ登るとすばらしい田園風景がひらけた。夏の丘の上でそよ風を受ける。旅に出た気分になる。これからの数日間興味深い体験が待っている。

ソールズベリー市場十五時三十分、宿は質清潔だ。女主人はフォードと上等のスーツに大そうな客とみなす。四時過ぎ町の中へ出る。古い木造の町並みを眺めた大聖堂を訪れる。

今朝丘に立ち眼下に見た大地は偉大だった。この偉大さは品格だ。

昔の思い出 偉大さから偉大な執事とは何かについて考える

二日目 朝 ソールズベリーにて

慣れないベッドでよく眠れない。早朝の明るさが漂う。七時半まで朝食も期待できない。

昔の思い出 ミス・ケントンの手紙

主要道路を避け田園地帯を走る。大聖堂の尖塔近く。ニワトリと認めブレーキを踏む。若い女が出来て来て、抱きかかえ、ネリーがひかれたらどうしようと謝る。こういうのもいい、ドライブを楽しめると答える。親切を感謝され親切を返してもらい気分は高揚した。

昔の思い出 父 一九二三年の会議

二日目 午後 ドーセット州モーティマード・ポンドにて

昔の思い出 執事になりたての頃

今朝ははればれとした天気だった。ドーセット州へ入った直後、エンジンから焼けるような臭いがした。車を止めた。丈の高い建物が、ベントレーが見えた。ワイシャツ姿の男が出て来て、ラジエーターに水を入れてくれた。本物の執事みたいで今のイギリスには珍しい、すばらしい事に乗っていると言う。

池に行ってみるようすすめた。男は執事と従事と運転手と掃除夫を一人が兼ねている。モーティマード・ポンドは美しく、小道をたどっていきそうになった。我慢して三十分ベンチに座った。十二、三人釣りをしていた。

昔の思い出 ウィックフィールド夫婦の訪問

三日目 朝 サマヤット州トーンにて

宿屋馬車屋に一泊した。小さな部屋で夕食にサンドイッチが出た。階下のバーでリング酒を飲んだ。ご当地ではメンドリが時をつくると冗談を言うが、農夫達は当惑気味に笑う。

昔の思い出 ファラディは私に冗談を期待している

昨夜の冗談は階下の人達を怒らせなかったか心配した。トーントンの大通りの喫茶室にはケーキやパンが並ぶ。サンセット州マースデンにはギフェン社があった。ギフェン社の黒蝋燭は銀器の磨き粉で有名だった。

昔の思い出 銀器磨きは執事の重要な仕事のひとつだ。いまから四十八時間以内にミス・ケントンと再会する。

三日目 夜 デボン州ダビストック近くのモスクムにて

昔の思い出 ユダヤ人召使解雇

ティラー夫妻の家の屋根裏部屋に泊まる。ガス欠を起こし夫妻の厚意にすぎた。昨日はラジエーターの水、今日はガソリンだ。単純な過失を二度起こした。執事は組織的な思考と先を読む能力が執事の基本の要件であるので挫折感を味わった。

ミスター・ティラーは村に宿はないから泊まっていい、旦那のような立派な方がモスクムを通ることはないと言う。ガソリン切れや近所の人と夕食の席に着いた後の出来事が辛い体験になった。ダーリントン・ホールの思い出で心が安らかになった。

昔の思い出 ミス・ケントンとの対応

今晚の数時間には疲れた。数人の村人には居心地悪かった。

今後、夫婦とおしゃべりをし、屋根裏に引き上げるつもりでいたら、ジョージ・アンドリュースが入って来た。ご立派な方がこの辺りを通ることはないと言う。夫妻は通りかかった誰かに伝え村中に知れ渡った。次々にやって来て、全員の乾杯を受ける。カーライル医師にも教え診察が済んだら来ると言う。

政治の話になり、外交政策に重きを置いたと言うと全員に畏怖の表情が浮かぶ。ミスター・チャーチルとは付き合いはないが、接することができたのは喜びだったと言う。

カーライル医師は車のところまで送る、ガソリンをどこで買うか教える。

ミスター・スミスは品格を私と異なった意味で使う。理想主義的に過ぎず理解は得られない。世界の大問題について主張しても空想に過ぎない。一般市民が理解できることには限界がある。

昔の思い出 三人の客が世界的問題についてスティーブンスに尋ね、彼は分からないと答えて笑われた。

農民が政治や世界の問題に関して、意見を述べても理解できてはいない。個人的感想だ。スティーブンスはその人達に話を合わせなければならない。言っても解らないし、言わなければ何かと思われる。この格差は埋めようがない。言葉の使い方自体にずれがある。この乖離はスティーブンスにもあった。雇主達の問題の取り上げ方に、知らないでいなければならない。知らなくても知っていても分かりませんと言っていないなければならない。農民に対するスティーブンス、スティーブンスに対する雇主と乖離は二重に展開する。

四日目 午後 コーンウォール州リトル・コンプトンにて

リトル・コンプトンに到着した。ローズガーデン・ホテルの食堂で昼食をすませる。出発以来いい天気だったが今日の雨は思いがけなかった。

カーライル医師がローバーで迎えに来てくれガソリンを一缶持って来た。村人との応対は上下の関係だったが医師とは対等だった。

彼は村人は悪い連中ばかりではない、静かな生活を望んでいると言う。スティーブンスはスミスは強い意見を持っているかどうかで品格の有無が決定されると言っていたと言う。

医師はフォードに乗りつけ見事な車と称える。マーンウォールへの州境を九時頃超える。今日のうちにミス・ケントンに再会する。リトル・コンプトンに到着して快適なホテルの食堂に座る。

昔の思い出 ミス・ケントンの部屋の閉じたドアに向かって立っている。

昔の思い出 イギリス首相、外相、ドイツ大使の会談

六日目 夜 ウェイマスにて

この海辺の町は一度来てみたかったところだ。三十分ほど遊歩栈橋の上を歩いた。明朝早めに出発すればお茶の時間までにダーリントン・ホールに着く。

ミス・ケントンはホテルに訪ねて来た。再会して二日目だ。彼女のすらりとした体格と背筋をのぼした姿勢は昔のままだ。

結婚生活は危険な状態ではない。娘がドーセット州にいる。二時間幸福なひとときを過ごした。カーディナルはベルギーで戦死し、ダーリントンは名誉毀損で敗訴した。戦時中非難され、戦後中傷された。名誉は汚され廃人同様だ。屋敷は静かだ。

ミス・ケントンは三度夫の元を出たが夫を愛している。スティーブンスとの人生を考えたりする。スティーブンスは今手にしているものに満足し感謝しなければならないと言う。

栈橋で二日前の再会の思い出にふける。六十代後半の男が、三年前隠退するまで近くの屋敷で執事をしていたと言う。いつも後をふり向いてはいけない、隠退してから楽しいと言った。男が去って三十分残る。明日、ダーリントン・ホールに戻り、ファラディをジョークで

びっくりさせる。

ダーリントン・ホールでスティーブンスは執事として成長する。ある範囲内において、決まった仕事を決まった通りにする。意見は述べず雇主に従い言う通りに過ごす。雇主が政治に関っていたのでこういう人達と接する。貴族、政治家等身分地位ある人と交流する。自己を抑圧し雇主に仕え仕事をまっとうし、品格のある執事になる。

雇主が代わり、自動車旅行を進められ出かける。フォードを運転し、高級背広を着、ダーリントン・ホールの執事として恥ずかしくない品格をして振舞う。旅で会う人は庶民だ。優しく素朴で思いやりがあり、各所を教えてくれる。見た目に立派だと称えられる。完成した執事がその姿を評価される。

ダーリントン・ホールでは限られた空間で限られた仕事を真剣にするのでミスは殆ど起きない。

旅行に出ると、分からないこと体験したことのないことに出くわし、失敗する。これは執事としてののではない。完成した執事に変わりはない。

(2) ミス・ケントン

ダーリントン・ホールで働きコーンウォールに去った。去って七年して初めて手紙をスティーブンスに出した。郷愁と願望が綴られている。

女中頭と副執事が結婚して退職して、父を副執事にミス・ケントンを女中頭に採用した。彼女はよい紹介状を持って来た。

食器室に花を生けた花瓶を届け、父をウィリアムと呼んでスティーブンスに注意された。注意を守り、仕事に慣れ熱心に女中頭を勤めた。父のちり取りの置きっ放しや三十人の配置のミスに気づく。彼には仕事が多過ぎる。体が弱っている、鼻を垂らしていると細かなことに気づき提言する。

スティーブンスの注意に後をつけて回って邪魔をするなど羽向かう。父が倒れると心配し手を尽くす。忙しいスティーブンスに代わり様態を説明し、目を閉じてやることまで引き受ける。

ユダヤ人解雇をスティーブンスが告げると猛反対する。仕事ができる二人を解雇すべきではないと言う。スティーブンスが雇主の意向に沿おうとすることにも納得しない。自分もやめるとまで言う。自分の意見を持ち主張していく。

叔母一人を見なくてはならず、別の屋敷を見つけることも難しいと判断し残る。生活に根をはった生き方をしている。現実的だ。スティーブンスが可愛い娘には気が散り置きたくないと思っていることを知っている。男女関係についても分かっている。

仕事を覚えたライザが突然僕と結婚しやめることになるとチャンスを投げ棄てると非難する。仕事があって生活が成り立ち、失えば成り立たなくなることをよく知っている。

食器室に勝手に入って行く。スティーブンスに止められても三回も花を持ち込もうとした。殺風景を明るくしようと思う。好きなスティーブンスのために思うが、彼には通じない。

彼が本を読んでいると何を読んでいるか知りたくて聞く。人が読んでいる本は誰でも知

りたいものだが何度でも聞く。プライバシーと言われても納得できない。彼への思いからは非知りたくてこだわる。しまいには力づくで書名を知る。おセンチな恋愛小説とがっかりする。一方的な判断しかできない。彼が英語力をつけようと読んでいることは知らない。ミス・ケントンは接触する表面だけを見て判断する。内面に奥に何があるか知らず、知ろうとしない。

スティーブンスを、自分に満足している、執事の頂点を極めている、領域内のことは全て目を届かせていると話す。

仕事の後、ココア会談を二人で持ち親密な打合せをする。スティーブンスの父の介護をし、忙しい彼の代わりに父をみとる。

幾度か行き違いがあったが、ミス・ケントンは思い続けた。そして、自分本位、仕事中心の生き方で、ダーリントン・ホール以外に目を向けないスティーブンスに見切りをつけ故郷の知り合いと結婚しようとする。

これから会いに行く、結婚を申し込まれていると気を引こうとするが、関心も示さない。会って帰って来ても、何も聞かない、仕事に戻る言い訳しかしない。申込みを受け入れたと言うとおめでとうと言う。ゆさぶりをかけても無反応だ。彼に愛想をつかす。十五年仕えたのに、やめるというのにそっけない言葉しかないと思う。

ミス・ケントンはスティーブンスとの結婚をあきらめる。彼には仕事しかない。愛はない、二人に愛は成立しない。結婚後三度家を出たが夫を愛せるほどに成長し、戻った。守るべき家庭がある。女中頭に疲れてやめた。仕事に戻ることはない。虚しく思い出すだけだ。スティーブンスとの生活も思ってみたりする。

(3) ダーリントン

五十代半ば、白髪、猫背の紳士だ。高德の紳士、道徳の巨人だ。ベルリンを何度か訪問し、戻って数日間真剣に考えこんだ。

戦後、敗戦国ドイツを罰し続けるのは道徳にもとる。ドイツの経済的混乱を静めないと世界中に広がると訴える。

非公式な国際会議を開き、ベルサイユ条約の過酷な条項改定を図ろうとする。争いが終わったのに敵を憎み続けることはけしからん、倒れた顔を足蹴りにするフランスの行為は野蛮だと言う。アマチュアリズムと呼んでいるものを大半は名誉と呼んで尊んでいる。プロは虚偽や権謀術数で言い分を通す人のことだ。善や正義より食欲や利権を求める人だと言う。

旧ユダヤ主義に基づいてユダヤ人召使いを解雇するが、間違っていたと反省し、二人がどこにいるか心配する。

長引く不況の真っ只中にある。人々が苦しんでいると言う。ドイツとイタリアは建直しを図った。ロシアもルーズベルトも大胆な一歩を踏み出した。イギリスは何もよくならないと嘆く。

ドイツ人とイタリアは強い指導者が出た。イギリス首相、外相、駐英ドイツ大使を招き秘密会議を開き事態を打開しようとする。

戦国、名誉毀損で訴訟を起こされ敗訴した。戦中非難され戦後中傷が続いた。名誉は永遠に汚された。廃人同様に屋敷も静かになる。

『日の名残り』

名残りは広辞苑に、物事の過ぎ去った後、なおその気配や影響などの残ることとある。余韻や残照の意味がある。日が沈んだ後のことだ。最終の場面は夕方を見て終わる。夕方は一日で一番いい時間と繰り返される。日は人の活動の時を表す。

スティーブンスの父は執事として活躍し、副執事を勤め、失敗し途中で亡くなる。

スティーブンスは執事として完璧に仕事をこなす。やがて些細なミスを犯し、ミス・ケントンに頼るが頼りにはならない。

ミス・ケントンは女中頭として働き、スティーブンスに片思いをし、田舎に帰り結婚するが、夫婦不和で（スティーブンスが介在するので）生活は思うようではない。

ダーリントンは雇主として政治に関る。華々しい時を過ごす、が、状況の変化にのみこまれ廃人同様に。屋敷も静かになる。

海辺の執事は地道な人生を送り隠退後のどかな生活を楽しむ。

人は日の盛りの時、目ざましい活動をする。それが過ぎると落ちぶれる。落ちぶれて終わる。